ごま葉枯病（原因菌：*Cochliobolus miyabeanus*）

１　病徴

育苗期及び本田生育期に発生する。育苗期には、葉鞘の褐変や葉の小斑点、生育不良等の症状が現れるが、本県では育苗期の症状はほとんど見られない。本田生育期の発生は、本県では 8 月中下旬頃から見られ、初めは下葉に黒色楕円形の小斑点が現れ、その後 2～3mm 程度の黒色楕円形で周囲は黄色の病斑となる（写真１）。本県での発生は主に葉で止まっているが、稀に穂まで達することもあり、「穂枯れ」症状を呈し収量や品質の低下を招く。

病斑はいもち病に似るが、ごま葉枯病は楕円形病斑で、葉脈に沿った壊死線は見られない。

２　発生生態

原因菌である *Cochliobolus miyabeanus*（写真２）は種籾や罹病残渣で越年する。気温の上昇と降雨に伴い、罹病残渣上に分生子が形成され、これが本田での第一次伝染源となる。葉の病斑上に形成された分生子が飛散し、時に穂を侵すこともある。養分が溶脱した老朽化水田や養分保持力の小さい浅耕土及び砂質土壌等のいわゆる「秋落田」で発病程度が高くなる。

本県では、砂質土壌が堆積している氾濫河川周辺地域（県南の久慈川流域、会津の宮川流域、南会津の伊南川流域等）での発生が目立つ。

写真１　ごま葉枯病斑

写真２　ごま葉枯病菌の分生胞子

3　防除方法

健全種子の利用や種子消毒により種子伝染を防ぐ。

本田では、深耕の実施や堆厩肥、客土、ケイカル（150kg/10a）の施用により、地力の増進を図るほか、生育後期の肥切れに注意し、カリ肥料の分施を行う。

本病の対策は耕種的防除が基本となるが、毎年発生程度の高いほ場では薬剤による防除を行う。